

なんでもない森から、
とんでもない未来が
はじまろうとしている。



林業×デザイン×デジタルによる住民発ものづくり

■ 町の宝ものを活かす、大きな決断。 高知県佐川町。
山あいの小さな町から、全国でも類を見ない画期的なプロジェクトが始まっています。「佐川の面積の約半分は人工林。先輩方が残してくれた宝ものをどうにか町の活性化につなげたかったんです」そう語る佐川町の堀見町長がまず目をつけたのが“自伐型林業”。山の面積当たり、より多くの雇用を生み出せること。初期投資が少ないため、新しく林業を始める人にとってハードルが低いこと。あらためてその良さが見直されている自伐型林業を佐川町に根付かせる決意をした堀見町長は、そのために何か新しい挑戦を模索していたそうです。その時、偶然手にとった本の著者が、プロジェクトのパートナーであるNPO法人イシュー・プラス・デザイン代表の筧さんでした。

■ 「さかわ発明ラボ」から始まる挑戦。「町長と自指しているのは、林業とデジタルファブリケーションを組み合わせて、佐川を新しいものづくりの町にすることです」そう語るのは筧さん。3Dプリンターやレーザーカッターなどのデジタル工作機器で、個人のものづくりの可能性を大きく広げるデジタルファブリケーション。そんな最先端のものづくりと林業が出会う場として誕生したのが「さかわ発明ラボ」です。これだけの機器が一箇所に揃う施設は日本中を探してもなかなかないというさかわ発明ラボ。この町の取り組みに興味をもつ若い人たちがさっそく都会から集まり、建築資材にできない佐川産の木材を新しいプロダクトへ生まれ変わらせる挑戦がすでに始まっています。

佐川町+NPO法人イシュー・プラス・デザイン
(高知県・佐川町)

■ 林業と町のみらいを、発明しよう。「このラボを通して次世代のクリエーターがこの町から誕生してくれたら、それ以上に嬉しいことはないですね」と語る筧さん。「自伐型林業と次世代のものづくりが手を取りあった“佐川モデル”を全国へ発信し、広げていくこと。それが私の使命だと思っています」そう力強く語る堀見町長の目線の先には、新しい林業の未来がありました。



森に並ぶのは、佐川産の木材に電子機器を内蔵させ、プログラミングによって動きや鳴き声を操れるオリジナル工作ロボット。今後教材としての事業化を目指します。



一般社団法人
農林水産業みらい基金

未来は、いつだって、現場から生まれる。私たち農林水産業みらい基金は、JA(農業協同組合)・JF(漁業協同組合)・J Forest(森林組合)グループの一員である農林中央金庫によって設立されました。

詳しくは [農林水産業みらい基金](http://www.miraikin.org/) 検索
<http://www.miraikin.org/>

